

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究  
「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」第1回公開セミナー

「『新しい野の学問』の時代へ』の著者菅豊氏を囲んで」

日時：

2014年6月6日（金）15時～19時

場所：

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室（306号室）

司会：西井涼子（AA研）

1) 著者による概要説明

菅豊（東京大学）

2) コメント

床呂郁哉（AA研）

佐久間寛（AA研）

3) 全体討議

参加者：12名

内容：

菅豊 『『新しい野の学問』の時代へ—知識生産と社会実践をつなぐために』へのコメント  
内容の正確な紹介ないしテキスト・クリティークというよりは、菅の著作に寄り添いながら、同書  
よって触発され、感じたこと、などをコメンテーター（床呂）自身の調査経験にも照らしながらコ  
メントを述べた。

まず全体の構成だが第一部では小千谷市東山地区：角突き（闘牛）のフィールド調査をめぐる話。  
とりわけ著者のフィールドでの「転回」、すなわちより深く当事者性を強めていく姿（勢子として、  
さらには牛のオーナーにまでなる）を振り返りつつ叙述となっている。また2004年10月の新潟県  
中越地震で小千谷市東山地区も被災したことからくる著者の関与や実践。単なる調査相手や「仕事」  
の相手ではなくなった（p.11）。第二部と第三部は日本やアメリカなどの民俗学（フォークロア）の  
歴史を振り返りながら、アカデミズム／その他（公共部門、在野の市民 etc.）という垣根を乗り越  
える「野の学問」の枠組みを提唱するという構成である。

コメンテーターはこのうち、とくに第一部を中心にその共感できる点や、フィールドワークの方  
法論などに関して評者にとって特に重要と感じた諸点を中心にコメントを述べた。また後半の第二  
部以降に関しては菅の提唱する「新たな野の学問」の可能性や意義、そして課題ないし疑問点など  
に関してコメントと質疑応答を実施した。

当報告の内容は著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.